

お玉ヶ池種痘所——その設立拠金者八二名誤謬説の起源をさぐる

深瀬泰旦

日本医史学雑誌第五十巻第三号 平成十六年六月十四日受付
平成十六年 九月二十日発行 平成十六年八月十六日受理

〔要旨〕 ジェンナー種痘発明百年記念の年（明治二十九年）にあたって盛大におこなわれた二つの記念会において展示された文書には、お玉ヶ池種痘所の発起に協力した医師八三名の名がしるされていた。しかしこの記念会の報告書など四点の印刷物においては、一点をのぞいて八二名の姓名しかあげられていない。これはおそらく単純な印刷ミスによるものと考えられるが、この時を起点にして八二名説が誤って流布されるようになった。その後昭和一九年に山崎佐の論文「お玉ヶ池種痘所」によってこの説は決定的に優位な立場にたち、戦後昭和三九年の小川鼎三著『医学の歴史』によってさらに確固たる地位をしめるにいたった。

キーワード——お玉ヶ池種痘所、設立拠金者八二名説、ジェンナー種痘発明百年記念会

はじめに

お玉ヶ池種痘所の起立にあたって、これに協力した医師は八二名であるという説が在来から流布されている。これについておおくの文献を検討していわゆる八三名説が正しいのではないかととして、一九七九年五月の日本医史学会例会

に口頭発表し、その翌年に雑誌『日本歴史』に投稿した⁽²⁾。その論文では印刷上の誤植によって八二名であると誤って流布されるにいたる経緯についても考察をくわえたが、この八二名説がいつからひろく認められるようになったか、その時期については史料の不足などもあつて明確にすることができず、さきの論文集『天然痘根絶史』⁽³⁾においてもこの点については明らかにできないまま、今日まで経過している。本論では八二名誤謬説が流布されはじめた時期について考察をくわえた。

ホイットニーの論攷

わが国の医学の歴史においてお玉ヶ池種痘所の存在が注目されるのは、明治期になつてからであるといつても過言ではない。明治初年に東京に医学校が誕生するにあつて、その先駆的組織がお玉ヶ池種痘所であることは、ここに関係するものの間では共通の認識であつたことは間違いないところである。しかしそれはきわめて限られた範囲であつて、医学界全体の共有認識ではなかつたようである。

お玉ヶ池種痘所——以下種痘所と略称する——の歴史についての文献を医史学関係の書物や雑誌について探索したところ、ある時期までは種痘所に関係した個々の医師——たとえば伊東玄朴とか大槻俊斎とか——の伝記の一齣としてして種痘所について記述することはあつても、種痘所の起立や沿革についてまとまつた論考として発表された論文は存在しなかつたといつても過言ではない。明治新政府になつてからの医学校や大学の経緯を記載した記録は東京大学に保存されているが、それ以前の徳川時代の状況をしるした文書類はみられないようである。『東京帝国大学五十年史』(昭和七年)を編纂するにあつて、明治維新前の記録は皆無であつたと執筆者である大久保利謙はのべている⁽⁴⁾。

ホイットニー Willis Norton Whitney (1855-1918) は『日本亜細亜協会会報』(一九〇五)に投じた Notes on the History of Medical Progress in Japan のなかでお玉ヶ池種痘所の創立にふれて、

Ito, Totsuka and Takenouti, with 77 others, formed themselves into a society for the purpose of founding an institution for vaccination, collected some 580 yen, and having obtained permission of the Shogun's Government, established a place of meeting at Otamaya Ike, Kanda.⁽¹⁷⁾

とのべている。すなわち伊東玄朴や大槻俊斎、竹内玄同が他の同志七七名とともに、幕府の許可をえて神田お玉ヶ池に種痘所を建設したというのである。これは二〇年ほどさかのぼる明治一七年(一八八四)に日本亜細亞協会で発表した講演で、そのころとしては種痘所の経過を要領よくまとめた唯一の論考といってよいであろう。ここにある協力者八〇名という数字の根拠については、引用文献の記載がないので明らかにすることはできない。

明治二九年の記念祝賀行事

ではその「ある時期」とはいつか。それは種痘所の歴史が回顧された明治二九年(一八九六)のことであるといえよう。この年はジェンナーが牛痘接種法を發明してから百年の記念すべき年にあたる。この記念すべき年に百年を祝賀するとともに、牛痘法がわが国に移入され、普及した歴史についても回顧しようとの気運が芽生えてきたということができよう。これを契機として、わが国の牛痘法の普及におおきな役割をはたしたお玉ヶ池種痘所の歴史的意義についても解明のメスがくわえられたのである。

この年はイギリス、ドイツ、フランスをはじめ世界各国でジェンナー種痘法發明を記念する行事がおこなわれた。その一、二をあげるとお膝元のイギリスでは、*British Medical Journal*が五月二三日号のすべてをあげて百年記念論文集として特集をくんでいる。ジェンナー以前の天然痘流行の歴史にはじまり、人痘接種法や牛痘接種法について詳細に記述し、これが世界各国に普及する様子を報告している。⁽¹⁸⁾

帝政ロシアにおいても同様の趣旨のもとに、ロシア衛生会が中心になって牛痘接種に関する展示会や記念式典を挙

することが報じられている。⁽⁷⁾ ジェンナーと同時代のエカテリーナ二世は人痘接種にも深い関心をよせており、牛痘接種についてもそれにおとらぬ興味をもっていたことは歴史に明らかなところである。帝政ロシアではこのような伝統が脈々として流れていたものと考えられる。

顕彰事業の萌芽

一方わが国の状況をみると、このころ各地の新聞が天然痘の流行を報じている。明治二九年三月三十一日付の『時事新報』によると、この三ヶ月間に東京府下で九一名の患者が発生し、三五名が死亡したという。⁽⁸⁾ この流行は翌年にもおよび、五〇歳以下の市民は全員種痘をうけるようにとの布告が、警視總監と府知事の連名で発せられたことを明治三〇年一月二六日付の『国民新聞』は報じている。⁽⁹⁾

内務省の『衛生局年報』によると明治二九年の天然痘の患者数は一〇七〇四名で、うち三三八名が死亡しているの⁽¹⁰⁾で致命率は三一・七%となる。翌三〇年は四一九四名の患者が発生し、二二二七六名が死亡している（致命率は二九・二%）。⁽¹¹⁾ 明治時代になって近代統計がとられてから最大の流行は明治一九年の七三三三七名であったが、明治三〇年はこれに次ぐ第二位の数字であり、この年までの数年は毎年三、四万名の患者の発生をみている。⁽¹²⁾

このような状況のなかにあつて、わが国においてもジェンナーの牛痘接種法になみなみな関心をよせ、その偉業を顕彰しようとの気運が芽生えてきた。しかしそれをおいてもジェンナーの牛痘接種法になみなみな関心をよせ、その偉業を顕彰しようとの気運が見いだすことができた。明治二四年（一八九一）に浜松の牛田友質と佐々木養は「善那祠堂」を建設する計画をたてた。この二人は会計係として浜松病院に勤務していた明治一五年（一八八二）ごろに、院長福島豊策の衛生講話をきいて、種痘の発明者がエドワード・ジェンナーであることをしって、その遺徳を顕彰しようと考えて「善那祠堂」の建設をおもいたったのである。

その祠堂のなかにジェンナー像を安置する計画をたてたが、はたしてジェンナーがどのような風貌の持ち主であるか皆目見当がつかなかったので、基礎的な作業としてまずジェンナーの写真の収集からはじめなければならなかった。ロンドンの日本公使館に写真の入手方を依頼したところ、ロンドン総領事館に勤務する大越成徳領事の尽力によって、六葉の写真を手に入れることに成功した。¹³⁾同志を糾合して資金募集に奔走したが、幾ばくもなくして日清戦争が勃発したことよってその計画はついに頓挫する憂き目にあつてしまった。¹⁴⁾

しかしこのような地道な計画があつたればこそ、その後この六葉の写真は中央の顕彰事業の主催者側に移管されて、それらの事業におおきな華をそえることになるのである。

二つの記念会

このような世界的潮流と天然痘の流行を背景にして、わが国においてもおおきな関心をもつてこの記念すべき年をおこした。明治二九年にはのちにのべるような二つの記念会が華々しくおこなわれるが、このほかにも日本各地で同様の集會がひらかれている。「大阪医学研究会雑誌」は「アバタ免疫の開山善那大先生報恩譜」の見出しのもとに「其他アチコチにて似寄りし報講供養ありといふ盛哉」とのべている。¹⁵⁾この記述は「学術雑誌の記事としては稍威厳を損するほどの口調にて暗に我会の拳を嘲笑せり」と『医談』が批判しているように、おおいに品位に欠ける文章であるが、それはさておき、かなりいかがわしい便乗行事がおこなわれていたようによめるのである。

そのなかにあつてつぎの二つの記念会は注目にあたいたるものといえよう。まず三月四日に、上野公園不忍池弁天祠畔長蛇亭でおこなわれた奨進医学会主催の記念会からのべよう。第五回医家先哲追薦会と時を同じくして「ジェンナー氏種痘発明百年期記念会」が開催された。その席上ジェンナーをはじめお玉ヶ池種痘所の発起に関係した医師たちの肖像画や書状類、さらには種痘書や痘科書などが展示され、それらのなかに種痘所発起の状況をしるす文書がふくまれて

いた。⁽¹⁶⁾

一方大日本私立衛生会をはじめとして、医事衛生に関係した八団体——十日医会、東京医会、国家医学会、顕微鏡学会、処和会、成医会、赤十字社病院、種痘積善社——が発起団体となつて、五月一四日に上野公園博覧会跡第五号館において「善那氏種痘発明百年記念会」が開催された。三月の記念会同様、その席上に種痘書や痘科書など数多くの参考品が展示されたが、ここにも「江戸種痘所創立書類」として一括される文書があり、そこには拠金者の連名簿もふくまれている。⁽¹⁷⁾

この二つの記念会の運営委員の顔ぶれをみると、三月の記念会は奨進医会の中心的メンバーである岡崎桂一郎、小原頼之、小池義三、江馬春熙、呉秀三、藤根常吉、富士川游の七名である。一方五月の記念会においては主催の九団体から数人づつのメンバーがくわわつて二二名で運営委員会を構成しているが、これには奨進医会はふくまれていないので、富士川游と呉秀三は国家医学会から選出されるという形をとっている。呉は国家医学会の幹事であるが、富士川は役員ではない。しかし富士川の参加がなければこのような事業を円滑に遂行することはできないので、国家医学会会員として運営委員に推薦されたものとおもわれる。

このように二ヶ月の間隔で記念会が開催されているが、三月の記念会がはじめて協議されたのは一月一四日であり、五月の記念会は一月二六日なので、両記念会が計画、立案されたのはほとんど同時といつてよい。そして編纂部門を担当したのは三月の記念会では富士川であり、五月の記念会では編纂掛は富士川を主任として、呉、江馬春熙、木村順吉が就任し、陳列掛としては片山国嘉を主任として富士川と呉が担当した。このような状況を見ると両記念会とも富士川や呉が行事の中核に深くかかわっていたことは明白である。

さらに詳しくそれぞれの記念会について比較してみよう。開催の趣旨についてみると、三月の記念会では

ジェンナー氏が牛痘種接の第一試験と為せしは実に西曆千七百九十六年五月十四日にして今を距る正に一百年な

り、爾來その術のために一命を万死に得たるもの果して幾何ぞ、其術の恩恵に浴したるもの果たして幾何ぞ、吾儕今日先哲の偉業を顧みて感謝すべきものを挙げなは必ず先づ指をこれに屈せざるべからず。¹⁸⁾

とあつて奨進医学会の趣旨に則つて先哲の偉業を顕彰し、それに感謝するの一語につきる。

一方、五月の記念会については、ジェンナーが発明した牛痘接種法によつて現在までに幾千万の人びとがその恩恵によつて病苦を免れることができた。さらに

本年は氏か西暦千七百九十六年五月十四日該法を發明せしより恰も一百年に相当するを以て文化の諸邦氏の功德を顕せん為め競ひて紀念会を催すと云ふ我国豈独り此挙なきを得んや¹⁹⁾

とのべている。至極穩当な発想の顕彰会であつたことはまちがいないところである。

その趣旨において色彩にいささか異なるところがあるとはいへ、根底においては両者になんら隔たるところはないが、主催団体やその内容においてはなおおおいに懸隔がみえる。三月の記念会は田口和美奨進医学会頭自らが主宰し、参加者は九八名、予算規模も一〇六円九〇銭という小規模ながら、ただ単にジェンナー種痘法の発明に祝賀の意をあらわすにとどまらず、科学的思考に裏づけられた牛痘法の意義を明らかにするとともに、人類の福祉への偉大な貢献にたいする顕彰の実をしめそうとの姿勢がみられる。

これに反して五月の記念会は、主催者として参加した九団体は医療関連団体とはいへそれぞれ性格を異にしているばかりでなく、その行事の内容においても三月の記念会とおおきな差異がある。会頭には宮内大臣土方久元伯爵をいただし、天皇・皇后からの三〇〇円の下賜金をはじめとして三二一八円六二銭という三〇倍にもおよぶ莫大な予算規模を有する会であつた。英国公使アーネスト・サトーをはじめ各国の外交使節、文部大臣西園寺公望はじめ貴族院議員や衆議院議員、陸海軍将校、帝国大学教授など顯官貴賈が参列した。土方会頭、サトー公使、西園寺文部大臣、衆議院議長蜂須賀茂韶、東京府知事久我久通、陸軍省医務局長石黒忠恵がこもごも挨拶にたつという、一般世人の牛痘接種法にた

いする啓蒙的性格のつよい記念会であつた。このときの予算の一部を大日本私立衛生会に寄付し、これによつて衛生会はジェンナーの銅像を作成した。これが現在上野の国立博物館正門右手の庭に、書物を片手に立つてゐるジェンナー像である。

両記念会ともにジェンナーはじめ大槻俊斎や伊東玄朴などの牛痘接種法に関係ある人物の肖像や、医史学的に重要な痘科書、種痘書などとともに、お玉ヶ池種痘所の起立や経過をしるした文書類が展示された。しかし三月の記念会のように参加者が医師であり、医史学に興味や理解をもつたものであればおおいに意義があつたものと思われるが、五月の記念会のような一般人を対象とした式典において、はたしてどれほどの注目を集めたかはおおいに疑問とするところである。

三月四日の第五回医家先哲追薦会と同時に、ジェンナー種痘發明百年記念会を開催しようという奨進医会の計画は、機関誌である一月二八日発行の『医談』三一号の巻頭に華々しく発表された。それによるとその内容はまことに氣宇壮大で、ジェンナーの業績を顕彰しようという意気込みのほどが感ぜられる。すなわちジェンナーの伝記（吳秀三、種痘法の世界への普及（高田耕安）、牛痘種痘法のわが国への移入と普及（富士川遊）、天然痘の流行とその予防と治療の状況（吳秀三、富士川遊）についてそれぞれが分担執筆して二一〇ページの小冊子を作成し、『ジェンナー種痘發明百年期紀念文集』として当日の参会者に配布された。この記念文集は当日配布のほか、販売許可をうけた吐鳳堂書店が欠席会員へは定価二五銭の二割引で頒布したといふ。²⁰

記念会の成果

このように啓蒙的性格の強い五月の記念会は、どのような成果をあげたであらうか。明治二九年ころの種痘は、明治一八年一月九日太政官布告第三四号の「種痘規則」にもとづいて実施されていた。種痘規則は明治七年にも公布され

ているので、これは便宜上第二次種痘規則といった方が紛らわしくない。

『衛生局年報』からそのころの種痘の実施状況を見ると、明治二十九年の総種痘数は四六七万余であり、記念会の翌年明治三〇年は前年の三倍以上の一五七〇万余となっている。この数字を見るかぎりでは、前年の記念会の効果がおおいに認められるといたいところであるが、天然痘の流行状況をかんがえあわせるとかならずしもそうとはいえない。

患者発生数と種痘接種をうけた人数を対比してみると、明治二九年以前でも患者の発生数と被接種者数とはパラレルの関係にあることがわかる。そのような状況を考えると、明治三〇年はその前年に比し約四倍の患者発生をみているので、それが種痘をうけるものの増加をうながしたものと考えられる。世間の耳目をあつめるような豪華な要人の出席をもとめ、三二〇〇円余という膨大な経費をかけて華々しく開催されながら、記念会の啓蒙効果はみとめることはできなかったといわざるをえない。

文書類の収集

富士川游が医史学の研究を本格的にはじめたのは明治二三、二四年ごろのことだとい²¹う。そしてこれらの業績が『中外医事新報』に発表されたのは明治二五年（一八九二）である。しかしそのころの論文には、種痘所の発起に関係した医師たちの業績について考察がくわえられているものの、これはあくまでも個々の医師の個人史という形でまとめられており、その業績の一環として種痘所の経緯についてふれるという記述しかみられない。種痘所の起立や経過についてまとめた叙述はまったくみられないのである。

富士川はこれらの医師たちの伝記をまとめるための史料を収集していく過程で、大槻玄俊の手許にあった種痘所の経緯をしるした記録を発見して、ジェンナー記念会のおりに展示しようとの意図をもったにちがいない。記念会を開催しようとの協議が始められたおりには、史料収集はかなり進捗していたということができよう。「皇国医人伝」の一編であ

る「大槻俊斎先生」の末尾に、「先生の嗣女俊君、今は其父の名を襲て俊斎と称し大磯に在り。此伝の材料及像は君の厚意によりて之を得たるなり」とあつて、明治二十九年一月に文章をまとめた⁽²⁾、としるされていることによつてもこれを裏付けることができる。

この一月というのはジェンナー記念会開催にむかつて準備がすすめられており、一月一四日にははやくも準備委員会がひらかれるという状況にあつたので、俊斎伝をはじめお玉ヶ池種痘所の起立や沿革についての史料収集は着々とおこなわれていた。これらの資料にもとづいて富士川游は大槻俊斎伝を草し、『記念文集』のために依頼された原稿——かれの分担は「種痘考」であり、「種痘術の我邦に入りし以来、その発達の由来を記述」することであつた——も完成していただであらう。

これらの経過からみると、史料の所有者は種痘所発起に深くかかわつていた大槻俊斎の嗣子玄俊であつたといえよう。しかしその大槻玄俊が三月記念会の参加者名簿にも、寄付者名簿にも名がみえないことは不思議といわざるをえない。この時期大槻玄俊の自宅は大磯にあつたことは、出品者の一人として「大磯 大槻俊斎君出品」——このころ俊斎を襲名していた——との記録がのこっていることによつてもあきらかであるが、本人は軍医としてあるいは地方の連隊に勤務していたために参加することができなかったのかもしれない。

種痘所関係の論文

この二つの記念会の報告書という形で現在のこされているのが

- ① 「江戸種痘所」『ジェンナー種痘発明百年期記念文集』（明治二十九年三月四日）
- ② 「種痘所発起」『医談』（第三二号 明治二十九年三月三十一日）
- ③ 「江戸種痘所創立書類」『善那氏種痘発明百年記念会報告書』（明治三〇年三月二八日）

であり、さらにこれらの文書をまとめる段階で作成された原稿が

④「江戸種痘所始末」『中外医事新報』（第三八八号 明治二十九年五月二〇日）として発表された（以下それぞれを『紀念文集』、『医談』、『報告書』、『中外』とよぶ）。

これらの文書について比較、検討をくわえてみたい。まず発刊の期日である。③の文書のみが翌明治三〇年発刊であるが、これは報告書の作成に意外に手間どっておよそ一年を要したため、報告書の基礎となった原文書が実際に展示されたのは明治二十九年の記念会のことである。すなわちこれらの文書はすべて明治二十九年に関係者の前に披露されたといえよう。

ではこれらの文書はいかなる性質のものであったか。明治二十九年に富士川游が大槻俊斎小伝を執筆するにあたっては、俊斎の嗣子玄俊からその肖像とともにいろいろな史料を借用して転写したとべっているように、これらの文書はそのころ大槻玄俊家に存在していたことはまちがいない。

展示された文書類がはたして種痘所発足にあたって作成された原文書であるか、あるいは富士川游が大槻玄俊から借用して転写した写本であるかは不明ながら、本文書の説明として付されている「富士川游君出品」という記述から考えると、そのころ富士川游がそれを所有していたことは疑いをいれることはできない。さらに展示に値する、歴史的に由緒ある文書ということは、これが富士川による写本とは考えられず、大槻家につたわる原本を富士川がゆずりうけて出品したと考えることができよう。しかし近年わたくしが富士川游の四男である富士川英郎にその文書の存在を確認したおりには、「わたしの手許には現存しない」という返事をいただいている。これら一連の文書について二〇〇三年秋に日本医史学会会員にたいしてアンケート調査をおこなったところ、活字による印刷物以外は、原本はおろか写本についても披見した会員は一人もないという結果をえている。

「江戸種痘所始末」

④の「江戸種痘所始末」はなかなか内容豊富な、資料的価値がおおきい文書である。種痘所の起立からはじまって時系列にしたがって沿革がのべられており、公文書としての伺い書や下し文が挿入されているが、それらは事実の裏付として史料を引用している「記録」に属する文献である。この文書は大槻家に保存されていたとかんがえられるので、筆録者はお玉ヶ池種痘所開設の準備段階から中心的役割をはたしており、のちに頭取に就任した大槻俊斎と考えるのが妥当であろう。文久二年に俊斎が病いにたおれた後は嗣子玄俊が頭取見習に就任しているので、以後は玄俊によつて書きつがれたと考えられる。明治七年（一八七四）までおよんでいる最後の四行は、この部分だけが候文ではなく、通常の文語文で表記されているのでいささか異質の感をうけることから、富士川自身書きくわえたのかも知れない。原文書が存在しないので筆跡を比較することはできない。そこでこのあたりの関係になるとあくまでも推測の域をでないが、展示に値する文書という条件を考えると、さきのように考えるのがもつとも妥当なところであろう。

連名簿の検討

さていよいよ連名簿について考察をすすめる段階にきた。さきの四種の文書にふくまれる連名簿をみると、つぎのような特徴がある。

①の『紀念文集』には人名の表記については他の文書とは幾分の相違をみとめるが、八三名の人名をきつちりのせている。戸塚静海と戸塚静甫の名は明記されている(図1)。ここでは日本全国にわたる牛痘接種の歴史を記載する一齣としてお玉ヶ池種痘所の経過を記述しているので、生の史料をそのまま掲載することはあえて避けているようにおもえる。そのため他の記録のように項目をたてて記載せず、説明文としての形式をとっている。

①「江戸種痘所」「ジェンナー種痘発明百年期記念文集」

○江戸種痘所

安政四年八月。伊東玄朴、戸塚静海、竹内玄同、林洞海、箕作阮甫、三宅良齋、其他四五輩、大槻俊齋ノ宅ニ相合シテ種痘所ヲ設クルヲ協議シ。當時西洋醫方ヲ以テ門戸ヲ都下ニ張ルモノ凡八十餘名ヨリ金ヲ齎シテ。翌年ノ春神田お玉か池ニ之ヲ設立セリ。齎金セル人名ハ。箕作阮甫、竹内玄同、高須松亭、永田宗見、林洞海、大槻俊齋、三宅良齋、坪井信良、織田研齋、三澤良益、坪井信道、川本幸民、戸塚静海、伊東玄朴、手塚良庵、渡邊春汀、手塚良齋、戸塚静甫、伊東玄晁、伊東南洋、山本

②「種痘所発起」「医談」(第三三号)

○種痘所創立齎金者

右場処家作等之義社中一統申談し出銀せる人名

箕作 阮甫	竹内 玄同	高須 松亭	2
永田 宗見	林 洞海	大槻 俊齋	函
三宅 良齋	坪井 信良	織田 研齋	
三澤 良益	坪井 信道	河本 幸民	
戸塚 静海	伊東 玄朴	手塚 良庵	
渡邊 春汀	手塚 良齋	戸塚 静海	
伊東 玄晁	伊東 南洋	山本 長安	

塚静甫の名は欠落している。

③の『報告書』にのる連名簿も「右場処家作の義社中一統申談出銀せる人名」との見出をもち、拠金者は八二名である(函3)。ここには戸塚静海のみがしるされてお、戸塚静甫の名はない。

④の『中外』にのる「江戸種痘所始末」の連名簿は「右場処家作等之義社中一統申談出銀せる人名」との見出がふされている(函4)。②と同様、数においては八三名である

が、戸塚静海が重複して掲載されており、その結果戸塚静海が脱落して実質的には八二名となっている。

このように八二名の連名簿には二種類あることがわかる。一は静海の重出によって結果的に八二名となった名簿であり、他は最初から静海が欠落しているので八二名になった名簿である。これによって結局②、③、④の三文書とも、拠金に協力した医師は八二名であるという結果になってしまった(表1)。

②の『医談』の連名簿は「右

場処家作等之義社中一統申談し出銀せる人名」の見出をもつ(函2)。戸塚静海が二度にわたって記載されているので一見八三名にみえるが、実質は八二名である。もちろん戸

表 1 連名簿の総括

①『記念文集』	83名	
②『医談』	82名	戸塚静海が重出
③『報告書』	82名	戸塚静甫が欠落
④『中外』	82名	戸塚静海が重出

③「江戸種痘所創立書類」「善那氏種痘発明百年記念会報告書」

一右場處家作の義社中一統申談出銀せる人名

箕作 阮甫	竹内 玄同	高須 松亭	永田 宗見	林 洞海	大槻 俊齋
三宅 良齋	坪井 信真	織田 研齋	三澤 良益	坪井 信道	河本 幸民
戸塚 静海	伊東 玄朴	手塚 良庵	渡邊 春汀	手塚 良齋	伊東 玄晁
伊東 南洋	山本 長安	大野 松齋	安藤 玄昌	益木 良齋	足立 梅榮

④のように戸塚

静海が重出する

という事態がお

きたのであろう

か。富士川游の

④「江戸種痘所始末」「中外医事新報」(第三八八号)

一右場處家作等の義社中一統申談出銀せる人名

箕作 阮甫	竹内 玄同	高須 松亭
永田 宗見	林 洞海	大槻 俊齋
三宅 良齋	坪井 信良	織田 研齋
三澤 良益	坪井 信道	河本 幸民
戸塚 静海	伊東 玄朴	手塚 良庵
渡邊 春汀	手塚 良齋	戸塚 静海
伊東 玄晁	伊東 南洋	山本 長安

原稿がこのように重複していたとは考えられない。原稿を作成するにあたってほんの一、二行前に

かいた戸塚静海を重複して書き加えるとは考えられず、重出の静海は原文書では戸塚静甫とかかれていたはずである。おそらく原稿には静海と静甫

の両者の名が書かれていたにちがいないが、富士川自身が著者校正をおこなわず、校正者のケアレ

ス・ミスからこのような結果になってしまったと

いうのがことの真相であろう。

それでは③の静甫の脱落をどう解釈すればいいのだろうか。これが印刷にふされたのはさきの『医談』や『中外』の発刊からおよそ一年後、すなわち他の三種の文書発刊から一年後のことであるという事情を考慮しなければなるない。すでに静海重出の連名簿が印刷物として世間に流布していたので、再度出現した静海をいとも簡単に消しきって、それによって静甫を抹殺するという結果になってしまったといえるのではなからうか。

その根拠はつぎのように考えられる。大正三年(一九一四)に呉秀三が『箕作阮甫』をあらわすにあたって種痘所関係の文書は大槻玄俊所有の連名簿を参考にしたという。そのために八三名の完全な連名簿をうることができたのである。すなわちこの文書の表題はとくに記されていないが、前書として「種痘館設立につき醸金した人々は大槻俊齋方に残った連名帳による」とあり、静甫をくわえた八三名説の医師の名がみえる。これによって大槻家が所蔵していた連名簿には八三名の医師の名が書き連ねられていたといえよう。そうであれば大槻家から借りた原文書を引用したさきの②―④の連名簿も八三名の姓名がかかれていたといつてよいであろう。

資料の保存という点から考えると、定期刊行物として発刊される雑誌や単行本の保存よりも、厚みに欠けるパンフレット類の保存には神経をつかうわりには結果的にはうまくいかないことがおおい。そのためいきおい『記念文集』よりも、『中外』のような定期刊行物からの引用がおおくなつてしまひ、せっかく八三名を網羅した連名簿が掲載されている『記念文集』を引用する機会がすくなくなつてしまつたといえるのではなからうか。お玉ヶ池種痘所への関心がたかまりはじめた明治二九年の段階から、八二名説は誤謬とは気づかれずに根強く世間に通用していたといつてよいであろう。八二名説といい、八三名説といっても、連名簿の原文書までさかのぼれば簡単に決着がつくはずであるが、現実には活字として流布していたのは八二名説であつた。さらにおおくの文献を披見すると「八〇余名」という漠然とした表記がむしろ多数派を思っているように見える。後にのべるように昭和一九年(一九四四)に山崎佐が八二名説を強調するまでは、八〇余名説が主流派であつたといえるかもしれない。

現代の刊行物

八二名説が流布されていたとはいえ、連名簿を些細に点検すれば戸塚静甫をふくむ八三名の医師がかぞえられるので、八三名説もけつして無視するわけにはいかないのだという事情も理解されていたにちがいない。そのため種痘所の

発起についてふれた論文の著者は、どちらが正しいかを確定することが困難なために、一方に軍配をあげるのが憚れる状況にあった。すなわち八〇余名と表記する意図の根底には、このような事情を理解した結果、苦肉の策として「八〇余名」という漠とした数字で表記することがよくおこなわれていた。これは「非特定派」、あるいは「不確定派」といえるよう。

一方そのような事情を理解していればもちろんのこと、たとえ理解していなくとも協力した医師の人数などはこの本質とは関係のない些末な議論として、漠然と「八〇余名」と表記した書物もおおいのではなからうか。これは「非追求派」、あるいは「無関心派」といえよう。このように八〇余名を唱えるものなかに二派がある。どの派に属しているやうとも八〇余名説が主流派であつたので、その例をあげるのほさして困難なことではない。⁽²³⁾

これらを見るといかに広範囲にわたつて曖昧模糊とした表記がおこなわれていたかがうかがえる。牛痘接種という時代の先端技術を実施する医療機関の創設に参画したことは、エリート集団の一員として誇るにたる事実であり、世間にアピールするに価する事業であるにもかかわらず、拠金者の一人である牧山修卿でさえもが漠然とした数字しかあげていないのは、まづたく理解に苦しむところである。⁽²⁴⁾

一方八三名説がいかに少数派であるかは、それらを探し出すのがなかなか困難であることによつても明らかである。その例としてはわずかに

『ジェンナー種痘発明百年期記念文集』（明治二九年三月四日 一〇五ページ）

呉秀三『箕作阮甫』（大正三年五月一六日 一五八ページ）⁽²⁵⁾

三浦義彰『文久航海記』（昭和一六年一二月 冬至書林 一七ページ）

浦上五六『適塾の人々』（昭和一九年九月二〇日 新日本図書 二八九ページ）

など四点をあげることができただけである。これらはいずれも戦前の出版物である。

しかし呉秀三も連名簿には八三名の名をあげながら、本文では

当時西洋医方を以って門戸を江戸に張って居たもの凡八十余名に謀って醸金をして翌年の春神田お玉ヶ池に種痘館を設立した

と記述しているので、協力者の人数などは事の本質とは関わりない些末な議論だと看過されてしまって、これが十分に浸透するにいたらなかったといえよう。

これらを見ると「そんな数字にいちいちこだわりなさんな」という声がかきこえてくるのだが、このような世紀の快挙に参加しながらその連名簿から欠落してしまった当の戸塚静甫にとつてはいかにも口惜しいことではなからうか。赤穂浪士が四十七士であったか、四十六士であったかということは、討入り直後から問題視されていたようであるが、当事者である寺坂吉右衛門にとつては命にもかえがたい大問題であったはずである。たんに数だけの問題ではなく、その武士にとつては心意気に関する重大問題なのである。

お玉ヶ池種痘所の歴史的意義を考えると、これに参加したか、しなかったかはその当人にとつてはゆゆしき問題であるはずである。歴史の一ページを飾るにふさわしい事業に参加しながら、その連名簿から欠落してしまったというのは死んでも死にきれまい。

山崎佐の主張

八三名説にとどめを刺したのが昭和十九年(一九四四)に山崎佐が『日本医史学会雑誌』に発表した論文「お玉ヶ池種痘所」²⁵⁾である。この論文はおおくの文献を博採して種痘所の起立と沿革を詳細にのべた唯一の論文として一頭地をぬく存在である。この論文で著者は確信にみちた表現で八二名説を主張した。三浦義彰が『文久航海記』において主張した八三名説を一刀両断のもとに、ものの見事に否定してしまった。『文久航海記』において

この頃から漸く蘭方医家の勢力も増して来た、そして良齋が好むと好まぬとに不拘、団体的行動をとるようになった、安政四年八月伊東玄朴、戸塚静海、竹内玄洞、箕作阮甫、坪井信良等の八十三名の蘭方医家は協力して神田お玉ヶ池種痘所を設立した、良齋も亦有力なる発起人の一である。²⁶

とのべているのにならして、山崎佐はさきの論文の注において、この書が三宅良齋や三宅秀の略伝でありその身辺雑話を編集したもので、真の史学的研究によるものではないから、一般史学的考究の見地からみると重要な箇所を担当おおくの杜撰誤謬が散見する、とあたかも信用するにたる論文ではないことをほのめかしたのち、

また「八十三名云々」とあるが、是は「八十二名」であり、²⁶と、ここで八二名説が正しいことをあらためて主張したのである。

この論理の運びはすばらしい。さすが法廷技術に長けた法曹界の長老だ、と感服するばかりである。このように斯界の最高権威者によつて明確に断定されてしまうと、それにつづく後学としては反論に価する史料をもちあわせないかぎり、これに従わざるをえないのが実状であろう。さらにこの論文がそれまでの史料を縦横に駆使して、はじめてまとめられた種痘所についての成果なので、これ以後、種痘所について論じようとするものはこれに準拠せざるをえないという状況が醸しだされてしまった。これによつて八二名説は決定的に優位な立場をしめるにいたつたのである。

しかし山崎佐といえども当初から八二名説に荷担していたわけではない。それは昭和六年に発刊した『日本疫史及防疫史』においては、「八十余名」という曖昧な表現を採用していることによつて明らかである。²⁷そのかが昭和一九年にいたつて八二名説を明確にうちだしたのは、昭和一六年に刊行された『文久航海記』の八三名説に対抗する必要があつたからである。明治二九年以来、連綿として語りつがれてきた八二名説が、この書物によつて否定されたことへの反発にあつたといえよう。

中公新書の『医学の歴史』

さらにこれに追打ちをかけるように、山崎佐に勝るとも劣らない学殖の持ち主である小川鼎三によって『医学の歴史』(中公新書)において八二名説が主張された。⁽²⁸⁾近代医学史上に燦然とかがやく東京大学医学部のルーツであるお玉ヶ池種痘所の歴史に造詣の深い小川鼎三は、山崎佐のさきの論文を十分によみこなして、自家薬籠中のものとして執筆したにちがいないので、八二名説を踏襲するのは当然である。新書という簡単に入手できる書物であり、一般読書人向けに執筆された碩学の著書ということで、本書の影響力たるや計り知れないものがあつた。これによって八二名説はさらに確固たる地位を占めるにいたつたといふことができよう。

これにつづく『東京大学医学部百年史』の編纂委員長が小川鼎三なので、この書においても八二名説がひきつがれてゐるのは当然といつてよいであろう。⁽²⁹⁾お玉ヶ池種痘所を主題にして文章を書こうとすれば、参考にする書物としては呉秀三の『箕作阮甫』のような限られた分野の著書よりも、『東京大学医学部百年史』の方に自ずと手が出してしまう。さらに新書版といえども小川鼎三という斯界の権威による著作である『医学の歴史』を参照してしまうのは、ごく自然のことであろう。これによって八二名説は確固たる基盤の上にその地位をしめる結果になつた。

ひとたびある学説が世間に流布してしまうと、これを訂正するのはかなりの困難がともなうことはよく知られたところである。あとから何度、そうではないのですよ、と声高に主張しても、一度インプットされた知識はなかなか訂正してくれない。しかし事実にもとづいての発言には、お互いに謙虚に耳を傾けなければならぬのであろう。

おわりに

拠金協力者八二名誤謬説はお玉ヶ池種痘所への関心がたかまりはじめた明治二九年という初期の段階から、単純なミ

スプリントによって世間に流布されて、その後百年にわたって根強く信じられていたのである。

本論の要旨は第一〇五回日本医史学会総会（二〇〇四年五月一日 横浜）の特別講演において発表した。
 ご指導いただいた酒井シヅ客員教授に感謝申しあげるとともに、お玉ヶ池種痘所の起立や沿革に関する文書についてアンケート調査にご協力いただいた会員の方々に深く感謝する。

注と文献

- (1) 深瀬泰旦「お玉ヶ池種痘所成立をめぐって」日本医史学会例会、一九七九年五月二六日
- (2) 深瀬泰旦「お玉ヶ池種痘所開設をめぐって」『日本歴史』三八八号、七九一八六ページ、一九八〇年
- (3) 深瀬泰旦『天然痘根絶史——近代医学勃興期の人びと』思文閣出版、二〇〇二年
- (4) 大久保利謙『日本近代史学事始め——歴史家の回想』岩波新書、一九九六年、七二―八二ページ
- (5) Whitney, Willis Norton: Notes on the History of Medical Progress in Japan, p. 129 in *Transaction of the Asiatic Society of Japan*. vol. 12 part 4, 1905
- (6) *British Medical Journal* May 23, 1896
- (7) 「ジェンナー祭典」『医談』三一号、一三一―一四ページ、明治二九年
- (8) 『時事新報』明治二九年三月三十一日
- (9) 『国民新聞』明治三〇年一月二六日
- (10) 『衛生局年報』明治二九年、一七ページ
- (11) 同書、明治三〇年、二一ページ
- (12) 厚生省医務局編『医制百年史』資料編、昭和五一年、五四四ページ
- (13) この六葉のジェンナー像の写真のうち、一はケンジントン公園にある彫像の写真、二はグロスター聖堂にある立像の写真、そして三はジェイムズ・ノースコート描くところの肖像画の写真であることは明らかであるが、その他の三葉については明らか

かにしえなかつた。ジェンナーの肖像画や塑像については機会をあらためて発表する予定である。

- (14) 三輪桂作「善那祠堂建設の企」浜松曳馬西尋常小学校編『善那余話』昭和十三年、一一二二ページ
本書は静岡文化芸術大学岩崎織志教授より恵与された。記して心からの謝意を表する。

- (15) 『医談』三五号、一三ページ、明治二十九年、より引用した。なお『医談』は奨進医会の機関誌である。

- (16) 「第五回医家先哲追薦会」『医談』三二二号、一一七七ページ、明治二十九年

- (17) 「善那氏種痘発明百年記念会」については『善那氏種痘発明百年記念会報告書』（明治三〇年）によるところがおおい。

- (18) 「ジェンナー氏種痘発明百年期記念会」『医談』三二二号、一一二二ページ、明治二十九年

- (19) 『善那氏種痘発明百年記念会報告書』五一六ページ、明治三〇年

- (20) 『医談』三二二号奥付、明治二十九年

- (21) 富士川英郎『富士川游』平成二年、小沢書店、五三一六四ページ

- (22) 富士川游「大槻俊斎先生」『富士川游著作集』七巻、昭和五五年、二三五―二三八ページ

- (23) その例としてつぎの種類の刊行物をあげておく。

- ① 富士川游『日本医学史』明治三七年、裳華房、八三一ページ

- ② 大槻如電『新撰洋学年表』明治一〇年、増補版、昭和二年、柏林社書店、一四二二ページ

- ③ 緒方富雄「伊東玄朴の人と交友」『日本医史学雑誌』一七巻、二二六ページ、昭和四六年

- ④ 山崎佐「日本解剖制度史」(八)『日本医史学雑誌』一三二八号、一四七―一五六ページ、昭和十九年

- ⑤ 『東京帝国大学学術大観 医学部 伝染病研究所 農学部』昭和十七年、一ページ

- ⑥ 牧山修卿「安政六年米国初航ノ始末」『医談』三二二号、六一〇ページ、明治二十九年

(24) 本書には八三名の医師の姓名と生没年がふされた連名簿があげられている。著者のあくなき探求心に裏打ちされた立派な名簿であり、現在もつとも参照しやすい著書なので目にふれる機会がおおいことによっておおくの後学に利用されている。しかしここにあげられている生没年についてはいくつもの誤謬があり、他の名簿と姓名の差異もみられる。それについてはつぎの論考において考察をくわえた。

・深瀬泰旦「お玉ヶ池種痘所開設をめぐって」『日本歴史』三八八号、七九―八六ページ、一九八〇年

これはのちに新たな史料を追加して『天然痘根絶史——近代医学勃興期の人びと』に「お玉ヶ池種痘所開設をめぐって」(五二―七三ページ)として収録した。

なお本書に比肩しうる文献として伊東栄『伊東玄朴伝』(玄文社、大正五年)がある。八二名説に荷担している本書の出版が、百年記念会の開催された年をはるかに隔たった大正五年なので、明治二九年における比較検討を目的とした本論においてはあえて採用しなかった。

- (25) 山崎佐「お玉ヶ池種痘所」『日本医史学雑誌』一三二九号、一五九―一六六ページ、一三三〇号、一八六―一九五ページ、一三三一―一三三二号、二〇三―二〇九ページ、一三三二号、二三四―二四一ページ、一三三三号、二五六―二六四ページ、昭和一九年
- (26) 三浦義彰『文久航海記』冬至書林、昭和一六年、一七ページ
- (27) 山崎佐『日本疫史及防疫史』昭和六年、二九六ページ
- (28) 小川鼎三『医学の歴史』中公新書、昭和三九年、一六三ページ
- (29) 『東京大学医学部百年史』昭和四二年、五〇―五一ページ

(順天堂大学医学部医史学研究室)

On the Origin of the False Theory on 82 Contributors to the Otamagaike Institution for Vaccination

Yasuaki FUKASE

The names of 83 doctors who united their efforts with establishment of Otamagaike Institution for Vaccination were written on the document which was displayed on the 100th anniversary meeting of Jenner's vaccination. But the reports of the meeting had only 82 contributors because of printing-mistake. From that time on the false 82 doctors theory is in circulation for a hundred years and held definitely a dominant position by Dr. Tasuku Yamaszaki's report in 1944. Finally History of Medicine written by Prof. Dr. Teizo Ogawa made the position firm in 1964.